ピア・サポート活動が大学生にもたらす 社会人基礎力への効果の検討

— 協調力、創造力、ストレスコントロール力、計画実行力に着目して —

○山田嘉徳¹・押江隆¹(非会員)・田中俊也²

(¹関西大学大学院心理学研究科・²関西大学文学部)

キーワード: ピア・サポート・プログラム、社会人基礎力、大学生

A Study on Peer Support Program and Effects for Employability Basic Skills of University Students

Yoshinori YAMADA¹, Takashi OSHIE^{1#} and Toshiya TANAKA²

(¹Graduate School of Psychology, Kansai University, ²Faculty of Letters, Kansai University)

Key words: peer support program, employability basic skill, university student

目 的

ピア・サポート活動とは、援助のための訓練を受けた同年代の仲間が問題に直面した仲間を支援する活動である。近年、大学でのピア・サポートの取り組みが注目を集めており、ピア・サポート活動による社会人基礎力の向上が期待されている。本研究では社会人基礎力(経済産業省, 2006)尺度の作成を行い(調査 1)、大学が実施するピア・サポート・プログラムの効果を検討する(調査 2)。

調 査 1

方 法

調査対象 関西地区 K 大学の学生 289 名を対象に、2009 年 1 月に質問紙調査を実施し、欠損値を含まない 226 名の有効回答を得た。

質問紙の構成 経済産業省が提唱する項目を基礎資料として 56 項目を作成した。回答は、「0 あてはまらない」～「4 非常によくあてはまる」の 5 件法で求められた。

結 果

因子分析の結果、「協調力」、「創造力」、「ストレスコントロール力」、「計画実行力」の 4 因子から成る 26 項目が抽出された。

Table 1 社会人基礎力尺度の因子分析結果表(最尤法,プロマックス回転)

項目	I	II	III	IV
I 協調力(a=.90)				
13 親身になって人の話を聞くことができる	.791	.007	-.026	-.022
45 相手がなぜそう考えるかを、相手の気持ちになって理解することができる	.721	.076	.034	.026
36 相手の話を素直に聞くことができる	.720	-.095	.100	-.010
46 たくさんの人が集まれば様々な意見があって当然だと思う	.713	-.068	-.112	-.161
54 相手に迷惑をかけないよう、最低限守らなければならない決まり事を理解している	.694	-.069	-.141	.113
8 相づちや共感を示すこと等により、相手に話しやすい状況を作ることができる	.664	-.097	.103	.071
8 立場の異なる相手の背景や事情を理解することができる	.656	.144	-.020	-.064
17 相手に迷惑をかけたとき、適切な行動を取ることができる	.622	.092	.006	.042
11 困っている人を見るとき援助して手をさしのべることができる	.608	.196	-.070	-.046
42 自分と異なる意見にも耳を傾けて受け入れることができる	.549	-.034	.110	.036
7 相手の話を途中でさえぎったり、話題を変えたりせずに最後まで聞くことができる	.532	-.157	.117	.007
20 規律や礼儀が特に求められる場面では、その場に適したふるまいができる	.521	.143	-.032	-.085
II 創造力(a=.86)				
5 誰も思いつかないような独創的なことを考えようとする	-.055	.922	-.111	-.104
26 従来の常識や発想を転換し、新しいものや解決策を作り出すことができる	-.096	.812	-.004	.123
6 失敗を悔れず、とにかくやってみようという大胆に取り組むことができる	.038	.704	.071	-.087
28 うまくいった状態を意識しながら、新しいものを生み出すためのヒントを探している	.003	.661	.096	.018
53 複数の考え方や技術を組み合わせて、新しい着想を得ることができる	.044	.599	.049	.135
4 自分なりに判断し、他者に流されず行動できる	.014	.505	.097	.003
III ストレスコントロール力(a=.79)				
19 嫌なことがあってもいつまでもくよくよと考えない	-.020	.003	.812	-.053
37 イライラしたことがあっても、重く受け止めないようにしている	-.093	.075	.786	-.031
55 イライラしたことがあっても、ストレスの原因を自分の力で取り除くことができる	.043	-.056	.656	.132
31 イライラしたことがあっても、自分の感情をうまくコントロールできる	.098	.065	.647	-.065
IV 計画実行力(a=.83)				
23 作業のプロセスを明らかにして優先順位をつけ、実現性の高い計画を立てられる	-.014	-.071	-.047	.950
22 自ら目標を設定し、やるべきことをテキパキと片付けることができる	-.078	-.007	.065	.786
3 課題が出ると、提出期限を自ら決める等の工夫ができる	.052	.003	-.036	.587
25 常に計画と現在の進み具合の違いに留意することができる	.061	.220	-.038	.448
因子寄与率(%)				
累積寄与率(%)				
因子間相関				
I 協調力	—			
II 創造力	.618	—		
III ストレスコントロール力	.563	.605	—	
IV 計画実行力	.515	.606	.444	—

調 査 2

方 法

調査対象 関西地区 K 大学のピア・サポート正課授業として開講された全学共通科目の受講生について、初回講義(2009 年 4 月)、最終講義(2009 年 7 月)の 2 時点の調査で回答を行った 1 年次生 37 名を調査対象とした(P 群)。また、統制群として、心理学の一般教養科目を受講し、4 月、7 月時点の調査で回答を行った 1 年次生 273 名を調査対象とした(C 群)。

質問紙の構成 調査 1 で作成された社会人基礎力尺度を用いた。

結 果

P 群、C 群毎で社会人基礎力の合計得点の変化を求めたところ、P 群、C 群は 4 月から 7 月にかけて得点が高くなった。2 要因の分散分析を行ったところ、時期の主効果が有意であった(F(1,308)=9.74, p<.01)。

さらに、社会人基礎力の下位因子に着目して、P 群、C 群毎に得点の変化を求めた。その結果、計画実行力において正課授業の効果がみられた。得点の変化をみると、4 月時点では C 群が P 群より得点が高く、7 月時点では P 群が C 群より得点が高かった。また、P 群は、4 月から 7 月にかけて得点が高くなった。2 要因の分散分析を行ったところ、時期の主効果が有意であった(F(1,308)=10.56, p<.01)。また、時期と群の交互作用も有意な傾向を示した(F(1,308)=3.13, p<.10)。

総 合 考 察

社会人基礎力は、ピア・サポートの正課授業の実施の有無にかかわらず 4 月から 7 月にかけて高くなるという結果となった。しかし、社会人基礎力の内実を詳細に検討した結果、「作業のプロセスを明らかにして優先順位をつけ、実現性の高い計画を立てられる」、「自ら目標を設定し、やるべきことをテキパキと片付けることができる」などの項目から成る計画実行力が、プログラムを実施することによって高くなることが確認された。実際に、正課授業後のアンケートでは、計画実行力の向上を示唆する記述がみられた。以上より、ピア・サポート・プログラムは、大学生の社会人基礎力における計画実行力の側面において一定の効果をもたらすものと考えられる。

今後は、社会人基礎力尺度の洗練及び、実際にピア・サポートに取り組む学生への効果の検証が課題である。

引用文献

経済産業省 (2006). 社会人基礎力に関する研究会「中間取りまとめ」—
<http://www.meti.go.jp/press/20060208001/20060208001.html>.